

国立国語研究所学術情報リポジトリ

従属節における係りの深さと受けの広さの相関について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-09-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田窪, 行則 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003011

「従属節における係りの深さと受けの広さの相関について」¹

田窪 行則

(国語研)

1. はじめに

日本語研究において広く受け入れられている原則に次のものがある。

(1) 文の成分の係りの深さと受けの広さには正の相関がある

主文の成分がこの原則に従うのは定義によるので南の A, B, C, D 類の成分がそれぞれ同じ類の述語にかかるのは当然である。係り受けの概念自体が原則(1)に合うように定義されているからである。しかし、従属節でこの原則が成り立つか否かは自明ではないし、実際引用節では明らかになりたない。それを一つの根拠として中村(2001)は、(1)は従属節では成り立たないとする。しかし、野田(2002)は、(1)の原則が従属節にも成り立つという観察を行い、引用節を例外とする。ここではこの野田の観察に基づき、なぜこの原則が日本語の従属節に成り立つのかを考察する。

2. 入れ子構造

田窪(1987)は南の4階層を以下のような句構造として表し、それに統語タイプと意味タイプを対応させた。

(2)

A = 動詞句 [様態の副詞 + [補語 + 述語]] : 動作

C = 節 [制限的修飾句 + [主語 + [[A + (否定)] + 時制]] : 事態

C = 主節 [非制限的修飾句 + [主題 + [B 2 + モーダル]]] : 判断

D = 発話 [呼掛け + [C + 終助詞]] : 伝達

南の4つの階層は、日本語の階層構造を非常にうまく表せていると同時に意味構造に対応しているといつてよい。田窪(1987)ではA-Dを次のような統語範疇と対応する意味タイプを表していると考えた(多少簡略化してある)

(3)

A = 動詞句 動作のタイプ

B = 節 事態のタイプ

C = 主節 判断

D = 発話 伝達

¹ 本稿は田窪(2005)の語順の部分を抜いて簡略化し、最近の考察を付け加えたものである。前半の部分は田窪(2005)と一部文言を除いてほぼ同じ内容である。

3. 野田 (2002) の一般化

野田は表 1 のような主文述語の階層構造からみた節種類を観察している。

表 1 主文述語の階層構造から見た節の種類 (野田(2002:27))

節の種類	節の例
語幹階層節 (ヴォイス階層成分)	<u>早く逃げろと</u> 叫んだ。
アスペクト階層節	<u>喜んで</u> 資金の援助をした。
肯定否定階層節	<u>テレビを見ながら</u> ご飯を食べている。
テンス階層節	<u>よく見ずに</u> 買った。
対事的ムード階層節	ぼくは <u>生れたとき</u> 、体重がすくなくかった。
対他のムード階層節	<u>安いので</u> 買った。 <u>環境はいいけれど</u> 、不便です。

野田によれば、これらの下線を引いた要素は、それぞれ主文の節の当該の階層の述語成分と呼応する。たとえば、「よく見ずに買った」の「よく見ずに」は、否定述語とは共起しない。「よく見ずに買わなかった」とはいえないからである。

さて、これらの節構造がそれぞれどのような内部構造をとるかにに関して、野田は次のような表をあげる。

表 2 (野田(2002:15))

節の種類	節の内部に現 る要素	ヴォイス	アスペク ト	肯定・否 定	テンス	対事的ム ード	対他のム ード
		(ら)れ る	ている	ない	た	だろう	ね
(節ではない)	喜んで	×	×	×	×	×	×
ヴォイス分化節	～ながら	○	×	×	×	×	×
アスペクト分化節	～ずに	○	○	×	×	×	×
肯定否定分化節	～とき	○	○	○	△	×	×
テンス分化節	～ので	○	○	○	○	×	×
対事ムード分化節	～けれど	○	○	○	○	○	×

対他ムード分化節 ～と(発言引用) ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

この表の見方は「表の左の方に上下に並んでいるのは、節の内部構造から見た節の種類とその代表的な節である。表の上の方に左右に並んでいるのは、節の内部に現れる要素のカテゴリとその代表的な要素である。」(野田(2002:15))である。表1,2から、階層から見た節と内部構造から見た節の相関関係について、野田(2002:16)は次のような表をあげる。

表3

節の例	階層から見た節	内部構造から見た節	南の分類
～ながら	アスペクト階層節	ヴォイス分化節	A類
～ずに	肯定否定階層節	アスペクト分化節	B類
～とき	テンス階層節	肯定否定分化節	B類
～ので	対事的ムード階層節	テンス分化節	B類
～けれど	対他的ムード階層節	対事的ムード分化節	C類

これを見ると内部構造からみた節は、それよりひとつ上の階層の節となるという一般化ができる。つまり主節の方の主要部が、補部を取る節は定義上一つ下の階層の節となる。そこで上の関係を主節を示してあらわすと次のようになる。

(4)

補部 主要部

- [ヴォイス分化節]+アスペクト
- [アスペクト分化節]+肯定否定
- [肯定否定分化節]+テンス
- [テンス分化節]+対事ムード
- [対事ムード分化節]+対他ムード

この補部と主要部からなる構造に対して、従属節がかかると以下のようなになる。

(5)

従属節 補語 主要部

- [ヴォイス分化節+ながら][ヴォイス分化節]+アスペクト
- [アスペクト分化節+ずに][アスペクト分化節]+肯定否定
- [肯定否定分化節+とき][肯定否定分化節]+テンス
- [テンス分化節+ので][テンス分化節]+対事ムード

[対事的ムード分化節+けれど][対事的ムード分化節]+対他ムード

つまり、これらの従属節を導く要素は、「同じ階層の節要素を結びつける」という点ではいわば「等位接続詞」と似たような役割をしていると見ることができるのである。

たとえば、「ながら」「から」などの接続助詞を conj と名づけ、それが受ける要素を X、X + conj がかかる要素を Y とすると節は次のように表せる。

(6) [[X+conj]+Y]

ここで X と Y は同じ深さの階層になる。conj は付加句を作る主要部とすると、この構成素の主要部は Y である。これをさらに主要部 Z が補語として取ると次のような構造になる。

(7) [[[X+conj]+Y]+Z]

これが「係りと受けの深さは相関する(= (1))」の内実である。

4. 係りと受けの相関

野田の観察が正しいとして、この係りと受けの相関がなぜ生じるのかは自明ではない。例えば英語のような言語では、定形の節が、必ず定形の述語の項として生じなければならないという制限はなく、(1) のような相関はないといってよい。非定形の動詞が定形の節をとっても良いし、非定形の節をとってもよい。

田窪 (1987) では、日本語の接続助詞はそれがとる節の統語タイプ・意味タイプが決まっているとした。これを進めて、日本語の接続助詞は、二つの同じ統語タイプ、意味タイプの節を関係づける 2 項述語であるとみることができる。

(8) C o n j (X , Y) X、Y は同じ統語・意味タイプ。

たとえば、「~ながら」は同一人物が行う二つの動作の並行を表すもので、この場合ナガラがとる節とそれが修飾する節はどちらも動作を表す。**ナガラ (動作 1、動作 2)** のように表せる。つまり、ナガラは一つの動作を取って、別の動作の並行動作として表すもので、限定修飾はつねに動作に対して行われ、ナガラがとる節はテンスの交替がない。

(9) 歌を歌いながら掃除をする。 ナガラ (歌を歌う、掃除をする)

これに対し、アイダがとる従属節はテンスの交替が許され、動作は同一人物でなくてもよい。

- (10) a. 花子が歌を歌っているあいだ次郎は掃除をしていた。
b. 花子が歌を歌っていたあいだ次郎は掃除をしていた。

このとき従属節のテンスは相対テンスで (10) の節のテンスは主節のテンスによって決まり、過去の事態を表す。したがって、(10a, b) は意味解釈に差はない。アイダはそれが取る節の主動詞が基本形の場合、ナガラに近いふるまいをする場合がある。例えば、(11)は、[花子が歌を歌っているアイダ]が、花子の歌が続いている持続時間を指定するだけの解釈が可能で、その場合、アイダは動作1の継続時間によって動作2の継続時間を指定する。この場合、(11)の[花子が歌を歌っている]と[pro 掃除をする]（あるいは[pro 掃除をしてい]）は同じ統語タイプ・意味タイプとみなすことが可能で、動作の継続時間を表す。

- (11) 私は、[花子が歌を歌っているあいだ、掃除をし]たい

これに対し、アイダがタ形(テイタ形)を取るとこの解釈はむずかしく、[花子が歌っていたアイダ]は、花子が実際に行っていた動作の継続時間中の「私」の欲求の持続時間を表すと解釈するのが一番普通である²。この場合もやはりアイダは同じ統語タイプ・意味タイプを関係づけるが、より動作より広い「事態」の間の関係を表すとみるべきである。

- (12) a. 私は、[花子が歌を歌っていたあいだ、掃除をしたかった]
b. *私は、[[花子が歌を歌っていたあいだ、掃除をし]たかった]

このように日本語の接続助詞は一般に統語・意味的に同じタイプを取る 2 項述語として特徴づけることができる。

この点において引用のトは全く性質を異にするものであることになる。ここでは中村(2001)に従ってトはC節をA類の副詞節に変換する標識であるとみればよいだろう

5. おわりに

以上をまとめると次のようになる。

- A. 接続助詞は同一の統語・意味タイプを取る 2 項述語である。
- B. A から、野田の一般化が導出できる。
- C. トは節を A 類の節に変える役割を果たすという意味で A の例外である。

² アイダニとすると継続時間中に動作を行うことを希望するという解釈も可能かもしれない。その場合、アイダとアイダニは取る節の統語タイプ・意味タイプが違うことになる。

このように考えるとなぜ日本語の接続助詞がこのような性質を持つのかが問題となる。その答えは日本語動詞の膠着語的な性質と関係していると思われるが、紙幅の都合でこれは次の機会としたい。

引用文献

- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」 『日本語学』 5月号 37-48, 明治書院
- 田窪行則 (2005) 「日本語の文構造」 朝倉日本語講座 1 『世界のなかの日本語』 42-64, 朝倉書店.
- 田村早苗 (2010) 「タメニのための様相論理」 KLS 30: Proceedings of the 34th Meeting of Kansai Linguistic Society 215-226
- 中村ちどり (2001) 『日本語の時間表現』 くろしお出版
- 野田尚史 (2002) 「単文・複文とテキスト」 野田他著『日本語の文法 4 複文と談話』 岩波書店 所収
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館
- 南不二男 (1992) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館